

## 地域情報（県別）

### 【福井】数億の借金を残して父が急死「院長就任は突然に」-木村晃朗・医療法人明峰会理事長に聞く◆Vol.1

心臓血管外科医から転身、経営多角化に成功

2024年9月12日 (木)配信 m3.com地域版

外来診療だけでなく在宅医療や産業医活動も行い、複数の高齢者施設やメディカルフィットネスを運営する医療法人が敦賀市にある。創業78年になる「明峰会」の木村晃朗理事長は祖父から続く3代目院長としてバトンを受け継ぎ、地域ニーズを踏まえた事業展開を行ってきた。しかし、院長就任は父の急死に伴う「青天の霹靂」であり、当時は数億もの借金が残っていたという。法人のこれまでと院長就任時のドラマを聞いた。（2024年8月20日オンラインインタビュー、計3回連載の1回目）

▼第2回は[こちら](#)

▼第3回は[こちら](#)



木村晃朗氏（本人提供）

## 時代の要請を受け、2000年代から介護事業も展開

——ホームページによると、医療法人明峰会は長い歴史があります。まずは、これまでの大まかな流れと現在の概要についてお聞かせください。

当法人の祖となる「木村医院」は、私の祖父である木村巖が1946年に開設し、1965年に父の邦夫が承継しました。父の代で診療所から一般病床52床を備える「木村病院」に転換し、父の死去に伴って私が2000年に継ぎました。

私は院長就任後、一般病床から医療療養病床に変え、さらに2009年には病床をなくして「明峰クリニック」へ。こんなふうには医療機関として姿を変えてきただけでなく、介護需要の高まりを受けて2002年に居宅介護支援事業所、2004年に介護老人保健施設と通所リハビリテーション、2009年に小規模サテライト型介護老人保健施設、2011年にメディカルフィットネス、2013年にグループホーム、2018年にサービス付き高齢者向け住宅を開設。これらの施設を院内または院外の近くに設けることで、地域の患者さんが当院を中心に医療・介護を受けやすい状況にしています。

## 人と接するのが「大好き」産業医活動も推進

——法人の人的体制と患者層はいかがでしょうか。クリニックでは在宅医療も行っているそうですね。

職員はおよそ120人で、1日の患者数は80~100人ほどです。私は勤務医時代、心臓血管外科を専門にしていたため、クリニックでは循環器科・内科・外科を標榜していますが、立ち位置としてはいわゆる「地域のかかりつけ医」としてさまざまな患者さんが来院しています。内科全般や腰痛、膝の痛み、ケガのほか、「蜂に刺された」「子どもが異物を飲み込んでしまった」なども。「何かあったら明峰さんへ」と親しみを込めてそう言ってくださる方もいます。

また、健診が多いことも当院の特徴の一つです。私は人と接するのがとても好きなので、産業医の依頼をほぼ断らないですね。1日に30~50人ほどが健診を受けてくれるほか、担当する企業の現場を見て回る巡視を定期的に行い、月に1度以上開催される安全衛生委員会にも参加しています。外来診療・在宅医療に加えて産業医の活動も並行するのはけっこう大変ですが、ほかの業種の方々とお話しするのもまた楽しいひとときです。

在宅医療は院長就任時から行っており、母校である金沢医科大学の後輩、佐々木規之副院長と2人で現在は30~40人ほどを訪問、年間20~30人ほどを看取っています。



明峰クリニックの外観（ホームページから引用）

## 「自分の代で病院は閉じる」父はそう語っていたが……

——おじいさまから続く医療機関なので、木村先生の院長就任も自然な流れだったのでしょうか。

いえ、予想外かつ突然の出来事でした。というのも、木村病院は父の代で閉院する予定だったためです。私は1991年に金沢医科大学を卒業して同大で研修を受けた後、大学の協力病院である石川県の恵寿総合病院に勤務しました。父は私に「家のことは何も考えなくていい。医師として、自分の好きなことをやりなさい」と話しており、私は関心があった心臓血管外科の道に進みました。この診療科は一般的に開業には向いていません。

父が私のことを尊重してくれたのは、自身の状況や思いも関係していたようです。父は養子として木村医院を継いだわけですが、本当は大学で自分の好きな研究をしたかったようで、承継後の病院転換は順調にいったものの、医師としては慎重なタイプで、1人の患者さんの診療に1時間ほどかけていたこともありました。クリニックでの外来経験を重ねてきた私からみても、経営はあまり向いていなかったのではないのでしょうか。ですから、父自身、「借金を返し終えてから閉院しよう」と話していました。

——「父の死去に伴っての院長就任」とのことですが、これは突然にお亡くなりになったということでしょうか。

そうです。朝の出勤前にトイレに行ったものの出てこず、家族が中で倒れているのを見つけて救急搬送、しかし、戻ってくることはできませんでした。前日まで普通に働いていたそうなので、私もとても驚きました。私は慌てて福井に行って葬式を済ませ、また勤務先に戻る予定だったのですが、このときに父の借金が数億円残っていることを知りました。その額を聞いたとき、「これは今のままではいけない」と思いました。私が勤務医を続けたり、また新たにクリニックを開業したりしたとしても、「返せる額ではないな」と。それに、病院には患者さんや職員もいました。いやおうなしに「私が継いで何とかしないとイケない」「でも、これからどうしよう…」といった形での院長就任だったのです。

——ホームページの内容からはうかがい知れませんでした。気持ちを切り替えるのも大変だったのではないのでしょうか。

心臓血管外科医として病院勤務を続け、将来的には金沢医科大学に戻るのでは——。そんなビジョンを描いていたので、まさに「青天の霹靂」でした。

ただ、こちらに戻って来てからすごく時間にゆとりはあったので、いろいろなことを想像したり考えたりすることはできました。先述の通り外来患者さんは少なく1日に10人未満、入院患者さんの対応も一通りラウンド（回診）したらやることはありません。当時はひたすら院内を回って環境や設備をチェックして、「ここをきれいにしたらいいのになどと考えたり、「何が地域に求められているんだろう」と想像をめぐらしながら休日には妻と一緒に自転車で敦賀の町を回ったり。ひっそりと人気のあるクリニックを見学したこともありました。

私は小学校を卒業するまで敦賀市で過ごしましたが、中学生のころは名古屋の学校に通い、また高校で敦賀に戻るものそこは全国から生徒が集まる全寮制であり、周囲に地元の人がほとんどいない環境でした。高校卒業後はすぐに石川県に出たので、院長になった30代前半まで地域の人との接点があまりなかったんですね。振り返れば、「久しぶりの地元」を味わう貴重な日々を過ごしていたとも言えます。

#### ◆木村 晃朗（きむら・てるあき）氏

1991年金沢医科大学卒。同大学病院、恵寿総合病院を経て2000年に木村病院院長に就任。2001年に医療法人化し、2009年に病床を閉じて「明峰クリニック」を開業。2000年代からは介護事業も開始し、複数の高齢者施設やメディカルフィットネスも運営する。

【取材・文＝医療ライター庄部勇太】

記事検索

ニュース・医療維新を検索

